

ながえの里だより

医療法人ながえ会 広報誌(第38号)

発行日 令和4年1月25日

発行責任者 西村美智子



日本医療機能評価機構 認定病院
医療法人ながえ会

庄原同仁病院

庄原同仁病院介護医療院
〒727-0203 庄原市川北町890-1

Tel : 0824-72-7300

Fax : 0824-72-7333

e-mail : info@nagaekai.com

URL : <https://nagaekai.com/>

『年頭にあたって思うこと』

医療法人ながえ会 理事長 村尾 文規

新年おめでとうございます

心からおめでとうと言い難い心境になるのは、やはりコロナの蔓延が、いまだ終息していないからである。コロナ禍は病床の中奥深く、侵入している。家族は分断されてしまっている。自由な面会が回避、制限されてしまう2年にもなる。ご家族の年老いた両親を思いやる気持ちはやり場を失い、ご本人にとって面会は、貴重な心温まる機会であり、慰めであるはずなのだからだ。我々もまた、仕事がら、外出を憚る状況では、ときに思いつきり大声で叫びたい心境にもなる。

この難局を乗り切る策として『密を避ける』がキーワードであることが指摘されてきた。ワクチンが開発されてトンネルの先に灯が見えるようになったとは言え、新たなオミクロン株の出現は、コロナウイルスとヒトとのいたちごっこのようにさえみえる。双方が存亡かけて戦っているのだから、今後も、ウイルスは変異を続けるであろう。当分、『密を避ける』は戦技であり続けるであろう。

これまでに約180万人が感染し、約1万9千人の尊い命が奪われたことを思うと、先の大戦を垣間見る思いである。それ故、この戦技は順守しなければならないのであるが、人それぞれである。人々の作為と不作為、ウイルスは、その間隙を易々とくぐり抜けてきている。人が理性による思慮、選択を経て実践することであるから、道徳的評価を担う主体と客体の関係。責めを果たすことを強要することはできまい。マスク警察なるものの出現はすぎた行為なのだがそれを正当化する向きも多かろう。

月知明月秋花知一様春（つきはめいげつのあきをしりはなはいちよのはるをしる）

月や花、草木など自然界のものは汚れも聖なるものも執着がない無生心であるからこそ観ていると人のこころを打つという意味なのだそうだ。マスク警察は、まず、自分の振る舞いを知って正すべきを正すことが求められる。広辞苑によると、他人を非難するとは、他人の欠点や過失を責めることと記載してあり、用例に、非難を浴びるとある。他人を非難すれば、自分も非難を浴びることにもなる。自分が輝いているときは、どんなときか、他人を非難するときは、いかなる時か、どちらも自分自身である。自分は自分で、それ以上でも以下でもない。自分自身の『心のありよう』は、他人を介してしかわからないものであるという。他人の存在、家族より長い時間を共にする同僚の存在が如何に大切か、庭の草木に教えを乞いたいものである。草木成仏という言葉もあるのだから。

新しい年が、コロナ克服を確信できる年になることを祈りたい。

基本理念

わたくしたちは、すべての人に等しく
仁愛の精神をもって接し、
心の通う医療の実践に努めます。

基本方針

患者様の満足：常に患者様の立場に立って行動します。
職員の満足：働きやすく、やりがいのある職場づくり
に努めます。
地域の満足：医療サービスを通じて地域の方々に喜ば
れるよう努めます。

「年頭に寄せて」

医療法人ながえ会 事務長 西村 美智子

新年、明けましておめでとうございます。

当院は、昭和62年3月に開設し、今年で35周年を迎えます。地域の皆様、保健・医療・福祉関係者の皆様のおかげと心より感謝申し上げます。

また、35年の月日は、開院当初から務めてくれていた職員が定年を迎える時期になり、感慨深いものがあります。

この35年間、病院を支えてくれている職員に本当に感謝しています。

年頭に当たり、この35年間ここで働いてくれた職員を思い浮かべながら、院長が日頃投げかけをしている「働くとは？」をテーマに書かせていただきます。

働くとは漢字の通り、人が動くことです。動かなければ働いているとは言えません。動かせるのは“身体”だけでなく、“脳”、“心”も動かせることです。またよく言われていることですが“はたらく”は“はた（傍）をらく（楽）にさせる”ことです。周りの人が楽になり、ほっとさせたり、楽しい気持ちにさせてあげることだと思います。

ある人は、働く＝人の問題解決だといわれました。病院は病気でしんどい、痛い、思うように動けない人の問題を解決してあげるのが仕事です。また身体的な事だけでなく、心の中の悩みも解決してあげる。結局どれだけの人の問題を解決し、相手に喜んでもらえたか、それが全てだと思います。

患者様やご家族に満足してもらえるケアをしていくには、患者さんの個々に応じた対応（その人の問題解決）をし、心身ともに心地よい状態にしてあげることです。そのためには、“身体”、“脳”、“心”すべてを働かせて、その動きを磨くことが必要です。働くスタッフがどれだけの知識を得て、どれだけ身体を動かし、どれだけの人の心に寄り添えたかが、患者さまの満足・職員の満足・地域の方の満足に繋がっていくのだと思います

働くとは、全身全霊で相手に寄り添い、相手の問題を解決してあげる事！理念に掲げてある“仁愛の精神”はその根源です。

今年もスタッフ全員が意識し、患者様に寄り添った看護・介護ができるように精進し、充実した1年にしたいと思っています。

栄養課より心を込めて

患者さまにお正月を感じていただけるように、スタッフがアイデアを出しながら、あせち料理をつくりました。

患者さまからたくさんのお手紙を頂き、スタッフも幸せな気持ちになりました。

栄養課 松原まゆみ



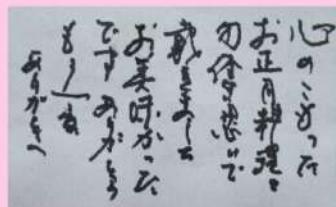
朝食



夕食

朝食には、お一人お一人に、スタッフ手書きの年賀状を添えました。

患者さまからの
お手紙



「自然の妙」

医療法人ながえ会 理事長 村尾文規

「白きちよう舞い降りたるや ヤマボウシ風に吹かれて浮きては沈み」

当院の中庭に3本のヤマボウシの大木がある。6月、その枝葉は盛んに生いたっている。緑を濃くした葉っぱの間から少女のリボンのような白い花が顔を出す季節だ。9月には小さな可憐な赤い実をつける。11月、落葉を終えたヤマボウシには空き巣が、そこそこにみられるのが常だった。ことしは様子が違っていた。小鳥たちの営巣の気配がなかった。といえば、今年は例の清楚な花は、確かに、少なかった。漠然とした印象だったが、いま、この光景を見て現実を認めざるを得ないのである。生きながらえるために花を落とし実を減らすしかなかったということを。

「よわきものに住処あたえしヤマボウシその身碎きて寒風にたつ」

例年なら生い茂った豊かな葉っぱが目隠しになり小鳥たちへの格好の住処になっていたはずだ。翻って、その赤い実は、小鳥たちによって、ここよりはるかに住み心地のよい土地に運ばれていたはずである。それができなかった。一身を顧みないで仏に仕えているかのように、木枯らしにその、身を曝しているように見える。ヤマボウシに見られるこの一連の変容を、今年は、コロナ禍のせいもあってつぶさに見たようだ。

晩秋うつろな目を向けているときに、ふと、あの日の光景が脳裏に蘇った。一人の女性がヤマボウシの大木に高い脚立をかけて剪定している光景である。当院の坂元春江氏、その人である。風通しの悪い中庭で生き延びるために、適切な介入は必須であるはずだ。

夏、40℃にもなる日もあったが、雑草を引き、種をまき、散水、移植などなど、ルーチンワークは、違えることはなかった。花を眺めていると、心が和むのは花が氣を送っているからなのだそうだ。一方、花と会話をしながら種まき、散水すると、花は、よく育ち、きれいな花を咲かせるという。花も人の気を受け入れてくれるらしい。立派な花守とはこういう人のことなのである。仕事への取り組みについて、以下のような養老孟司氏の記述がある、

『仕事とは社会に空いた穴のようなものだ、目の前の穴を埋める。それが仕事というのだ。自分に合った穴があいているはずがない。合うとか合わないとかの問題ではない。一旦、引き受けた仕事は、1から10までやらなくてはいけない、中途半端な仕事をしてはならない。そういうふうに仕事をしているうちに考えも変わる、自分も育ってくる』とある。

天職は、初めから用意されているわけではないのである。与えられた仕事になりふりかまわず没頭してみることだ。白い清楚な花は微風に煽られて上下に揺れ、白い蝶が舞っているような纖細な動きで、逆らうこともなく為すがままである。その様は、事にあたって、作為のない人の振る舞いにも似ていた。今は、すっかり葉を落としている。裸木は、つくろうこともなく、ありのままの姿であり、さながら、我欲、自我も捨てた修行僧にもみえるから人を引き付けるのである。見上げると、梢に花芽、葉芽が揺れている。

ヤマボウシの花言葉は友情である。友情を忘れてはいないようである。

たまには、外に出て、自然の妙、摂理に触れてみてはどうか。ひとが如何にちっぽけな存在であるか思い知らされるであろう。

イキイキさん紹介

管理部 環境管理

坂元春江

雪が降って庭の仕事も一段落、これから門松づくりに集中・・・いやいや、梅の選定にヤマボウシの伐木、もみじにカイガラムシの消毒・・・と全く集中できない私。

自己紹介します。当病院で庭の管理等行っている坂元です。時折、高い木又は屋根の上に居て患者様等を驚かせていますが、四季折々の花（たまに野菜）を咲かせて、皆様に楽しんでいただくことが本来の私の仕事です。

とは言え、昨今、早くなる桜の開花、遅くなる紅葉、12月になっても見かける蝶、極端な天気の変化など対応が難しくなるのかなあと思います。勉強不足のせいかも・・・（笑い）

これからも体力が続く限り（老人会 入会済み）皆様に楽しんで頂けるよう精進します。



各部署の今年の抱負

看護部

限られたスタッフで職務に当たることになりますが、理念の中核をなす『思いやる気持ち』を決して忘れることなく、職務を全うしたいと思っています。

薬剤科

患者さんの病態、状態を理解しながら、薬物療法が適正におこなわれるよう務めていきます。

栄養課

コロナ禍・人数不足のこの環境に不満や不安さをかかえて過ごすのではなく、何か少しだけ、見方や考え方、やり方を変えることで、気持ちよく働く環境作りができればと思います。そのためにも、“見直しができる所に気付く”を目標にし、その素敵な環境から、“おいしい食事”が出せるように皆で頑張っていこうと思いますのでよろしくお願ひいたします。

リハビリテーション科

日々、患者さまの「想い」を言葉、表現、仕草から汲み取り、運動、作業活動、環境設定を工夫し、院内生活が少しでも心地よく、快適に送られるよう心掛けて、尽力します。

管理部

事務部門

窓口にてご家族と病棟との橋渡しをしながら、コロナ禍においても、温かみを感じていただくよう対応していきたいと思います。

環境管理部門

清潔で、安心できる院内環境と、季節を感じながら過ごしていただける環境づくりを日々行っていきたいと思います。

洗濯

患者様の洗濯物を衛生的に仕上げ、ほころび等の修繕も行っていきたいと思います。

編集後記

約1年ぶりのながえの里だよりの発刊となりました。

昨年はコロナワクチン接種の開始、また緊急事態宣言も何度も発令され、広報委員会もなかなか開催ができませんでしたが、新しい年を迎えるに当たって、私たちの想いだけでも発信しようと、新春号の発刊となりました。コロナ禍で季節行事（ご家族を招いてのお花見会や夕涼み会）の中止や面会制限がある中で、何とか患者様に元気を出してもらおうと、アクティビティ委員やレク担当者、栄養課スタッフ、その他各部署のスタッフが、アイデアを出しながらいろんな取り組みをしてくれました。今回は残念ながらその様子を掲載することはできませんでしたが、今年はそのような記事をできる限り発信していきたいと思います。また、法人のホームページやFacebookも合わせてご覧いただければ幸いです。

本年も、どうぞよろしくお願ひいたします。

事務長 西村美智子